

日本法社会学会第 24 回学会奨励賞選考結果

2020-2023 年 期 学 会 奨 励 賞 選 考 委 員 長 阿 部 昌 樹

2022 年中に刊行された、45 歳以下の本学会会員の執筆した単著書を選考対象とした第 24 回学会奨励賞（著書部門）は、東京大学出版会より 2022 年 2 月に刊行された齋藤宙治会員の著書『子どもと法——子どもと大人の境界線をめぐる法社会学』に授与されました。

齋藤会員の著作は、「子ども差別」という「問題」の存在とその内実を示すとともに、この問題に、法はいかに対応すべきかを論じたものです。第 1 に、「子ども差別」という、これまではほとんど注目されてこなかった「問題」の存在やその内実を、オリジナルなサーベイ調査やシナリオ実験によって得られた信頼性の高い社会科学的データを用いて、また、それぞれのデータを、それぞれにふさわしい適切な手法を用いて精緻に分析することによって、説得力のあるかたちで示したことが、高く評価されました。それとともに第 2 に、そうしたデータの精緻な分析によって得られた社会科学的な知見を踏まえて、「チャイルディスト法学」という新たな法分野を開拓していくことの必要性と可能性を示した意欲的な姿勢も、高く評価されました。

第 1 の点は、法に関連した社会的問題の社会科学的分析という、法社会学という学問の中核に位置づけられるべき研究実践が、今日の学界の研究水準を踏まえて、洗練された方法で、堅実に展開されているということに他なりません。齋藤会員は、自身が設定した研究課題に取り組むためにはどのようなデータが必要であるのかを精確に認識したうえで、複数のデータ収集計画を立案し、データ収集を行い、得られたデータを適切な手法を用いて分析しています。そして、「子ども差別」というこれまで看過されてきた「問題」の存在やその内実を、説得的に示すことに成功しています。それは、法社会学という学問の発展に対する大きな貢献であるということが出来ます。

評価された第 2 の点は、「子ども差別」という「問題」の存在を指摘するだけにとどまらず、この「問題」に法実務はどのように対応すべきかという問いに、正面から取り組んでいるということです。「事実／存在」に焦点を合わせた研究実践を「規範／当為」

に焦点を合わせた研究実践と、どのように架橋すべきかという問いは、これまで多くの法社会学者を悩ませてきた問いであり、「存在から当為は導き出せない」と割り切ってしまう研究者も少なくありません。それに対して、齋藤会員は、アメリカにおける平等原則をめぐる違憲審査基準に関連した判例等を素材にして、「子ども差別」という「問題」の「存在」についての実証的知見を、慎重に吟味された手順を媒介として、その「問題」に対処するために必要な規範的法理論の洗練へと役立てることを試みています。経験的法社会学の立場から、法解釈学や法実務の刷新に貢献しようという野心的な試みであり、やや荒削りで、試論的な段階にとどまってはいるものの、法社会学と法解釈学や法実務との生産的な対話へとつながっていく可能性があることが高く評価されました。

なお、2022 年中に刊行された、40 歳未満の本学会会員の執筆した単著論文を選考対象とした第 24 回学会奨励賞（論文部門）に関しては、選考対象となった論文の中に、興味深いテーマに取り組んでいる論文や、発展可能性のある分析を行っている論文が複数ありましたが、研究の経過報告的な段階にとどまっていたり、掲載誌の紙幅の制約等から、分析がやや表面的なものにとどまっていたりして、いずれも、学会奨励賞の受賞作とするには物足りないと評価せざるを得ませんでした。そこで、今後、より本格的な研究へと発展した段階で、改めて学会奨励賞の受賞作とすべきかどうかを検討した方がよいだろうということで、受賞作なしとしました。

受賞の言葉 第24回学会奨励賞著書部門

齋藤宙治（東京大学）

この度は、拙著『子どもと法—子どもと大人の境界線をめぐる法社会学』に、学会奨励賞を賜りまして、誠にありがとうございます。大変光栄です。選考の労を取ってくださった学会奨励賞選考委員会の先生方に心より御礼を申し上げます。

子どもと法というのは複雑な問題なのですが、本書では1つの試みとして、子どもを社会の中のマイノリティー集団と捉えたうえで、「子ども差別」という視点の提示を試みました。子どもと大人の区別はあたかも当然のことだと考えられがちですが、もう少し慎重に検証する必要があるのではないかという問題意識です。

本書は、実証研究による問題提起（第一部及び第二部）と、問題解決に向けた法理論的研究（第三部）から構成されています。もっとも、各論となる各章ごとにトピックや研究手法が多様に異なっています。実証的なデータが入手可能なトピックを選び出したり、研究手法についても少しずつ勉強・模索しながら取り組んだりしたためです。そのため、全体をどのように構成して各章をどのように位置づけるべきかを何度も検討し直し、研究をまとめるのには非常に苦勞しましたが、どうにか出版までこぎつけることができました。無事に出版できたこと自体が私にとってはとても嬉しいことでしたが、今回、学会奨励賞までいただけて幸甚です。受賞を励みに、今後も研究を一步一步進めてまいりたいと思います。

なお、本書については、学会誌『法社会学』の最新号（89号）に、土屋明広会員による書評が掲載されています。著者の私が自分でいうのもおこがましくて恐縮なのですが、同書評は、多様な章があって全体を読むのに手間がかかる本書の趣旨を丁寧に読み解いてくださり、本書の概要と課題をととてもわかりやすく批評してくださっています。本書本体を読む時間がないという方は、ぜひ学会誌をお手に取って、書評からご覧いただければ幸いです。

また、ご参考までに、私の勤務校の2つのウェブページにも、一般向けに本書の簡単な紹介記事が掲載されています。①社会科学研究所・新刊著書訪問インタビュー記事 (https://jww.iss.u-tokyo.ac.jp/interview/publishment/hsaito_2022_02.html)

と、②UTokyo BiblioPlaza・著書紹介記事 (https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/A_00200.html) です。

最後に、執筆に際しては多くの方にお世話になりました。特に、東京大学法学政治学
研究科助教時代の指導教員の太田勝造会員からはいつも温かくかつ鋭いご指導をいた
だきました。さらに、出版後には、佐藤岩夫会員、飯田高会員、ディミトリ・ヴァンオー
ヴェルバーク会員に論文博士の学位審査を担当していただき、今後の研究の発展に向け
て示唆に富むご助言もいただきました。また、本書の研究内容については、学術大会や
関東研究支部研究会などでも報告の機会を得ました。学術大会等で研究にコメントをい
ただけることはいつも本当にありがたく感じており、日本法社会学会というコミュニテ
ィーに参加させていただけていることを幸せに感じております。この場を借りて、お世
話になったすべての方に感謝を申し上げます。